

日本の昔話

19

日本放送出版協会

肥後の昔話

■ 稲田浩二 監修

■ 浜名志松 ■ 三原幸久 ■ 三宅忠明 編

監修者

稲 田 浩 二

1925年岡山市生まれ。広島文理科大学を卒業し、現在、京都女子大学文学部教授。
主著・主論文に『日本昔話通観』（共編）『昔話は生きている』『説話文学必携』（共著）「日本霊異記話型の一考察」「今昔物語集の説話性に関する試論」など。

編 者

浜 名 志 松

1912年天草生まれ。県立青年師範卒業。旧制県立本渡高女、小学校長、県教委指導主事、天草教育研究所長を経て、現在、天草町教育長。
主著に『天草の民話』『ガルニエ神父伝』など。

三 原 幸 久

1932年大阪市生まれ。大阪外国語大学イスパニア学科卒業。現在、大阪外国語大学助教授。主著に『スペイン民族の昔話』『ラテンアメリカの昔話』『スペインの昔話』『ブラジルの民話』など。

三 宅 忠 明

1939年岡山県長船町生まれ。岡山大学法文学部（英文学専攻）卒業、現在、岡山就実短期大学英文学科助教授。
主著に『スコットランドの民話』『英訳・岡山の民話』など。

日本の昔話19

<検印廃止>

肥後の昔話

定価 1800 円

昭和52年9月20日 第1刷発行

監修者 稲 田 浩 二

編 者 浜 名 志 松

三 原 幸 久

三 宅 忠 明

発行者 藤 根 井 和 夫

印刷 凸 版 印 刷

製本 石 津 製 本

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1

郵便番号150 振替東京1-49701

©1977 Koji Inada

Simatu Hamana Yukihisa Mihara Tadaaki Miyake

落丁本・乱丁本はお取替いたします

0339-015019-6023

いのち長きものへの畏敬

稲田 浩二

遠いわれらの祖先から口づたえに伝えられてきた日本昔話の現状は、たとえていえば、目に見えない地下水のようなものです。それは、あわただしい情報と速度に飲みこまれた人々にとっては多分だんの生活には無縁であり、ときおりふとなつかしむ過ぎ去った日々、ふるさとのようなものでありましょう。けれども、その地下水は、いまもつつましく生きている、心ある人々がその気になつてたずねるならば、やさしくことばをかけ、耳を傾けるならば、意外にみずみずしいことば——昔語りが地上にわき出るものなのです。わたしどもは、ここに一九七〇年代の一つの証言として、日本の各地にわたるこの種の実験をありのままにみなさまにご報告いたしたいと思います。

昭和の初年、柳田国男が昔話を学問の対象とした当時、すでに昔話は生活の表面から姿をかくしかけていたようです。柳田国男はこれを受け、一日も早い調査をと人々に訴えています。それから半世紀たったいま、昔話はいつそう地表から深くもぐり、代ってブラウン管や活字の「民話」が

人々の目をうばっております。それにいちいち目くじらをたてるというのではありません。新しい皮袋に盛られて、「民話」はどこへ向けていくのか、多少の不安をもって見守りたい、とわたしなどは思っております。ただ、これまでこれほど一律に昔話が扱われたことはなかったので、昔話の世界も年とともに従来なかった変化を蒙るのではないかと思います。いや多分それはもうある程度まで進行しているにちがいありません。東北に伝承してきたはずの昔話が、ブラウン管や活字をへてこつ然として山陽地方に現われてくるということです。したがって、昔話が村や町、家々に伝わるという土着的・風土的な本質は、よほど注意深く扱わないと裏切られることになります。

「日本の昔話」はこの意味でかたくなに、村々家々に口づたえされてきた昔話に限って収めることにしました。編集にたずさわる皆さんはいちいち語り手のところにおもむいて、一つ一つの話を聞き出し、録音テープに収め、これをそのまま文字に移すことにしました。それはぶこつだけれど、ありのままの口づたえの姿を最もよくとどめるものだと思うからです。したがってこれは、読者のかたにそれほど口ざわりがよいくない食べものかもしれない。土から掘り出したままの、いわば料理の素材だからです。ただそれをじっくり噛みしめていただけなら、現代日本のつましい素顔の一つに出会えるはずです。テレビや書物でなめされない、日本人の飾らないものの見方、表現、よろこびとなげき……総じて日本人の人生のありのままがこめられています。

どうしたわけか、これらのことばは、同じ棟の下に住んでいる家族でさえも耳にすることがほと

んだいものです。語り手ご自身も多くの人が何十年ぶりに語ったという種類のものです。したがって、大部分の話がたまたまよい聞き手の編集者に出会って、水を得た魚のようにふき出して世に出たものです。いまわたしどもは、これを命長きものへのおしみと畏敬の念をもって世にokりたいと思います。これがよい読者をえて、新しい明日をうんでいくかとなれば、語り手とわたしどもの望外の幸せであります。

一九七七年四月

はしがき

テープレコーダーが広く利用されるようになってからも、熊本県にはそれほど調査報告が出ていないので、ぜひ未調査の町村を中心に伝承の実態を調べてみないかと監修者の稲田先生に勧められ、知人の矢田部美智子さんのつてを頼り、熊本県出身の学生を交えて、三人の学生と共に初めて上益城郡矢部町を訪れたのはもう三年半も以前のことである。

教育委員会のお世話で、各地区ごとに数人の方々に集まっていたいて昔話をうかがうことになった。予想以上に豊かな伝承がまだ残っていた。夏には岡山就実短大の三宅忠明先生にも同行を願ひ、さらには天草における民俗学研究、郷土史研究のベテランで、『天草の民話』の御著書もある浜名志松先生に共同研究をお願いした。先生には、昔話研究でまだかけ出しの私の頼みを快く聞き入れてくださり、天草と県南部の調査を分担してくださることになった。

二年ほどの間の調査で、私個人の採訪だけでも四〇〇話からの昔話をテープに録音することができた。本書は私達三人の採集した昔話の中から、一部、最良の話を選んで編集したものである。このささやかな昔話集が、郷土のなまの昔話を愛する人びとに読まれ、また報告の少なかった空白地帯を少しでも埋めることにより、昔話研究者にプラスすることができれば幸いである。

多くの話者の方々、お世話くださった各町村の教育委員会の方々、それに慣れない方言の聞き取りについて私を助け、教えてくださった熊本県出身の矢田部美智子さん、大阪外大の上田恭子さん、関西外大の清水千素、山田才喜、守田陸男の諸君に心からのお礼を申しのべたい。それでもまだ、方言のネィティヴ・スピーカーでない私の担当部分には思わぬ聞き取りや解釈の誤りがあるかも知れないと恐れている。最後に、詩情あふれるすばらしいカットをお寄せくださった地元の栗崎英男氏にあつく感謝の意を表したい。

一九七七年八月五日

三原 幸久

凡 例

凡 例

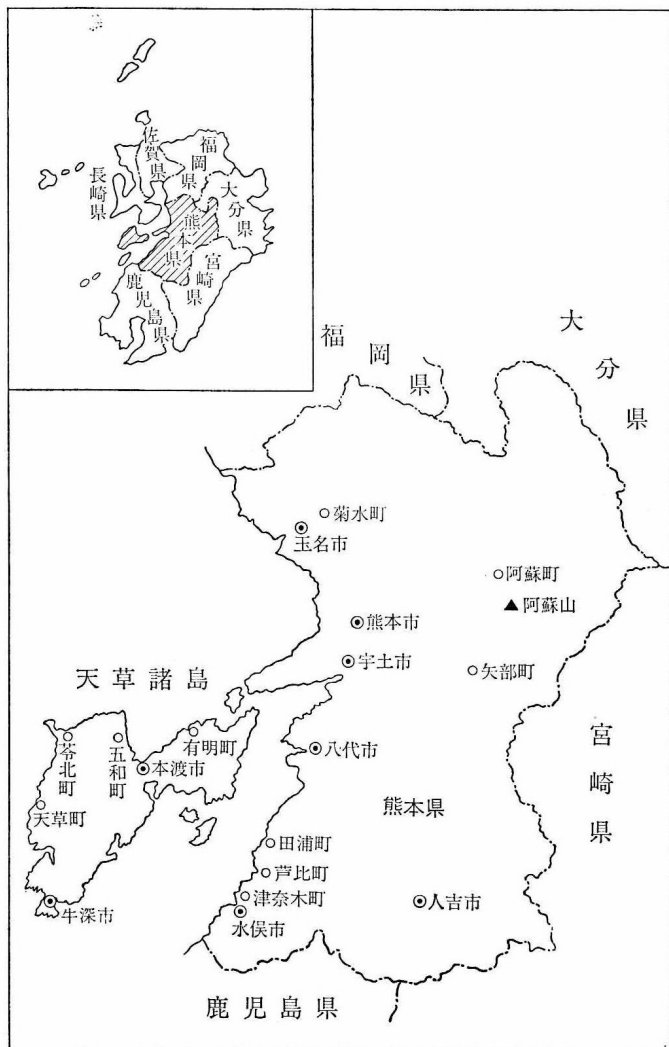
- (1) 本書の昔話は、語り手が方言のまま語ったものを、できるだけ忠実に録音テープから翻字したものである。
- (2) 本文の題は、語り手が題名をはっきりと言ったものを除き、編者がつけたものである。
- (3) それぞれの昔話の後に『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送協会編、日本放送出版協会刊）の話を示している。また、名彙になくて『日本昔話集成』（関敬吾編、角川書店刊）にあるときは、その話を示している。
- (4) それぞれの本文の後に、その語り手の現住所と氏名を記した。
- (5) 方言は聞きわけられる限り忠実に記録しようとしたが、特に母音の狭母音化や、一部の方言に表われる無声音化は聞き別けられる場合のみ、便宜的に近い普通のかなで表現したことを断っておく。
- (6) 本書の昔話の配列は、郡ごとに北部から順に並べ、郡内では町村別に、さらに同一町村内では話者ごとにまとめて配列した。
- (7) 本書の編者は編集三名の協同の作業によるものであるが、本文の翻字の分担は次のようでした。

た。

浜名志松Ⅱ天草郡、芦北郡

三原幸久Ⅱ玉名郡、阿蘇郡（二一四～一三〇ページ）、上益城郡、八代市

三宅忠明Ⅱ阿蘇郡（六七～一二三ページ）



目次

いのち長きものへの畏敬	1
はしがき	5
凡例	7
地図	9

昔話

玉名郡

継子の椎拾い	24
舌切雀	26
天狗の隠れみの笠	28
ばた餅は如来様	31
屁ひり嫁	33
はしご屁となぎなた屁	34
源九郎の天昇り	36

座頭さんとだご汁	39
首のすげ代え	41
源九郎と栗のいが	42
源九郎の九そう跳び	44
猿とがにゃの餅争い	45
狸と婆汁	48
歌詠み婿	50
継子と尺八	52
夢見小僧	53
こぶ取り爺	56
子守唄内通	58
ポーブラ女房	59
らんの歌	60
そうめんの名忘れ	61
雀と燕	63
古えんもり	64

阿蘇郡

たにし息子	68
蛇婿入り	70
皿々山	71
継子の椎の実拾い	74
舌切雀	75
婆とたこの足	78
うばすて山	79
屁ひり嫁	80
狸の仇討ち	81
鼻たれ小僧様	85
座禅豆は本尊様	88
ついたての虎	89
山伏と狐	90
屁こき嫁	92
団子婿	93

子供の寿命	95
法事の使い	98
百合若大臣	101
天狗孫兵衛	105
平家を語った座頭	108
食わず女房	110
古屋のもり	111
めでたい名前	112
歌くらべ	114
ひがんとひーがん	119
人のわりき	121
継子いじめ	124
お布施の間違い	125
火事の話	126
がわっぱと狐	127
ほととぎすと兄弟	129